

Hilma  
af Klint  
Webiner

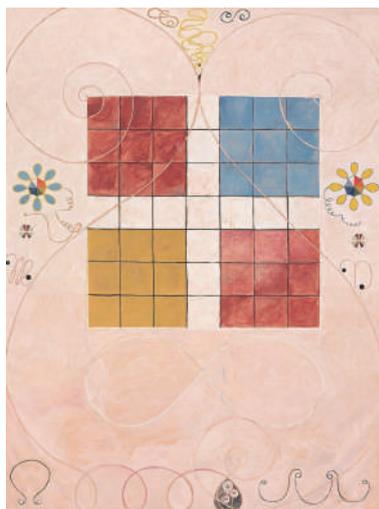
オンライン講座

# ヒルマ・アフ・クリント

探求、そしてシュタイナーとの出会い

Hilma af Klint's quest and her encounter with Rudolf Steiner

世界に彗星の如く“発見”され、現在東京でアジア初の展覧会が開かれているヒルマ・アフ・クリント。生命のリズムや変容を感受し、精神世界を色や形・イメージで表現した「抽象画の先駆者」である彼女が、ルドルフ・シュタイナーとの出会いやにじみ絵によって学んだものとは何か。彼女の生涯や作品を追いながら、人間にとっての探求と変容、そこから生まれる「新たな統合」についてアンドリュー・ウォルパート氏とともに紐解いていきます。



アンドリュー・ウォルパート



エマーソンカレッジ（イギリス）での「スピリット・オブ・イングリッシュ」コース、シュトゥットガルト（ドイツ）の大学での「イングリッシュ・イヤー」、ブダペスト（ハンガリー）でルドルフ・シュタイナー・セミナーを主催するほか、ロシアとイタリアのヴァルドルフ学校にも勤務。

2000年代より日本における人智学研究にも積極的に貢献してきた。その美術史研究は、巨石文化、ケルト美術と初期キリスト教美術、イタリア・ルネサンス、19世紀イギリスの芸術家、そしてゲーテアヌムの建物とその周辺における建築、彫刻、絵画、色ガラスといった表現にまで及ぶ。

2025 **5/25**  
14:00-15:30

受講方法：オンライン  
参加費：2,000円  
(storesよりご購入ください)

オンラインチケットの  
購入はこちら

QRコードからの  
購入はこちら



日本中のシュタイナー学  
校の高等部生徒が集う  
「芸術祭」を応援しよう！



寄付サイト



チケット販売

本講座は全国シュタイナー学校高等部合同芸術祭（8月17日）に向けたイベントとして開催いたします。

# 探求というものの本質

どこかへ辿り着きたいという否定しがたい衝動を持つこと

|| 目標に向かいまだ手に入れていないが手が届くであろう

ものへ向かって努力すること旅に必要な意志とエネルギーは

「未到達のものへの憧れ」から生まれる、

これらの「具象的」作品は、色彩の繊細なグラデーション、浸透する光、トーン、魂の雰囲気表現において彼女の天才性を示し、植物や解剖学的研究は見事でした。しかし、彼女にとって最も重要だったのは、時に図式のように明瞭なビジョンや霊的知覚を形、色、様式化されたイメージで表現することでした。このため、彼女は現在、抽象芸術のバイオニアとして称賛されていますが、その社会的な評価は、ここで扱っている探求というテーマに直接関係するものではありません。

彼女は最初からリズムと変容に現れる生命の現実を知っていました。それを『3枚の最大作品』では大胆に、『エロス・シリーズ』では繊細に、『白鳥と鳩』シリーズではエネルギーギッシュに、『薔薇シリーズ』ではジェンダーとエロスの神聖さの探求として、『バルジファル』シリーズのような謎めいた調子の変化として、『知識の樹』シリーズのような繊細で微細な形態で表現しました。彼女は植物の観察と創造的な瞑想を通じてこの変容を積極的に実践し、繊細なドローイングから明確な思考の厳密さを持つ直感的な幾何学的表現、さらには本質的な道徳的指針にまで至りました。変化と成長の避けがたい真理が、彼女の作品全体を通じて忠実に表現されています。何枚かの変容的シリーズでは、一つのイメージが次の作品で変化した形で再描写されます。作品は生きたプロセスの静止した段階の肯定であり、鑑賞者は直感的にその過程を追うことができます。にじみ絵（ウェット・オン・ウェット）技法との出会いは彼女にとって大きな転換点でした。この技法によって、彼女は一枚の作品内で変容のプロセスそのものを体験することが可能になりました。

彼女の探求の頂点は、この統合された変容の実現でした。彼女の生涯における様々な共同作業、交霊会、スピリチュアリズム、神智学などの形而上学的・霊的な結びつきは、芸術的な旅の展開に役立ちました。ルドルフ・シュタイナーとの出会い、そしてにじみ絵技法を紹介されたことが、彼女の探求の成就となったのです。彼女はドルナッハで「自分の家に帰った」と感じ、アントロポゾフィーに最も深い願いの答えを見出しました。1980年代初頭に人智学協会および精神科学自由大学の会員となり、ルドルフ・シュタイナーの死後の協会運営に失望したものの、2014年に亡くなるまで人智学への献身を続けました。誰の人生や仕事にも多様な評価が可能です。

## 何かを見出そうとする確かな意図

ヒルマ・アフ・クリントの個人的・芸術的な人生の完全性という観点から見ると、彼女の疲れをしらない探求は、最終的に全く異なる成果へとつながる探索の段階を軽視したり否定したりする必要がないことを原型的に示しています。彼女の人生と作品そのものが統合された変容の表現です。

正確にその目標がどのようなものであるかはわかりませんが、それが確かに存在し、追求する価値があるという強い確信だけがあります。最初の道筋は明らかで、自信をもって出発します。それは孤独な旅かもしれませんが、仲間がいて励まされることもあるでしょう。風景は最初のうちは自分を肯定してくれるものですが、時に刺激的あるいは不安になるほど見知らぬものとして現れます。しかし、進むべき方向は正しい道を歩いているという経験から自然にわかってくるでしょう。ところが、分かれ道に直面すると、正しい道はどちらなのかと疑問が生じます。正しいと思っていた方向が幻想にすぎないと判明し、来た道を引き返すことが必要になるかもしれません。ときには、反対方向へ行くことが、本当に正しい道を見つけるために必要な準備となることもあります。仲間が先に進んだり、遅れをとったりするかもしれませんが、最初は気づかなかつたがずっと一緒に旅していた仲間の存在に気づくこともあるでしょう。

探求への忠実さは、失望や絶望、失敗感によって試されることもあります。最初の熱意と確信を新たにする必要があるかもしれません。やがて、目標は新たな姿をとり、自分自身も変わっていくことに気づくでしょう。このような変化は、探求を続ける意志とエネルギーを確認させてくれます。

もし運命が許すなら、求めていたものに近づき、それと実際に関わることができるとき、最初に想像していた目標が正しかったことを発見します。しかし、その現実には想像を超えるほど違ったものであることに気づくでしょう。

これらすべては、目標を達成することで生じる責任を負う準備を整えるプロセスの一部です。探求とは、目標達成によって恩恵を受けることではなく、それに貢献できるようにするためのものです。この旅は、私たちの変容し続ける進化の原型的な要約であり、到着することだけが目的ではありません（また希望を持って旅することだけでもありません）。私たちが何を求められているのか、何ができるようにしたいのか、何を与えられるのかを認識することが目的です。芸術家にとってこれは、素材や媒体、スタイルという形で最初に提示されるものを受け入れることから始まります。自己を超えた誠実な忠誠心があれば、芸術家は特定の規範を手放し、新しい創造方法を取り入れ、ときに劇的に、ときに自然に予期せぬ新しい表現様式へと向かうでしょう。

これはすべて、ヒルマ・アフ・クリントの個人的および芸術的な人生においても真実でした。彼女は独自の自信を持ち、慣習にとらわれない個人生活と社会生活を送りました。彼女独自の繊細な風景画、力強い肖像画、人間の姿を魅力的なジェスチャーで描く際の独特の手法を確立しました。